

高野公彦の自画像

小田部雅子

作品と〈私〉の関係

作品には〈私〉が反映する。作中の〈私〉≠作者ではない作品もあるので一概には言えないが、単純に分けて〈私〉のありかたはA・B・Cの三つだ。高野公彦の短歌でいえば、
A 風いでて波止の自転車倒れゆけりかなたま
ばゆき速吸はやすひの海 『水木』

作品に〈私〉を登場させずに描く場合。描かれた〈世界〉は〈私〉の目から見た〈世界〉であって、〈私〉が反映する。読者は、描かれた世界を鑑賞するだけでもいいし、描いた〈私〉を感受してもいい。この歌の〈世界〉は広い海を背景にスローモーションのように自転車音が音もなく倒れる光景である。読者はこの光景をいいなあと鑑賞すればいい。さらに青年≠〈私〉の遙かなものへの思いを感じとつてもいい。
B ざらざらに照れる沖見ゆかなしともただに
青春を生きたし我は 『水木』

作中に〈私〉を登場させる場合の一つの形で、ダイレクトに〈私〉から言葉を発して〈私〉を語る場合。読者に見えてるのは声を発している〈私〉(≠作者)の姿である。その声は多くモノログであるが読者に直接向く場合もある。輝

く海にむかって、充実した生を切なく希求する声を、読者は〈私〉から直接に聴く。

C にんじん君、きうり君とか声かけて夕餉を
作りをり高野老 『短歌研究』二〇二〇・四

作中に〈私〉を登場させる場合の二つ目の形で、作者が第三者の目で俯瞰して〈私〉を描く場合。読者に見えるのは「〈私〉によって描かれた〈私〉」と「描いた〈私〉」の両方であり、描いた〈私〉(≠作者)と読者が並んで、「描かれた〈私〉」を眺めることになる。そこでは、にんじん君やきうり君が楽しそうだねえ、可愛いねえ、ちょっと寂しいかもねとテレビの前の家族のような会話も成り立ちそうなほど、読者と〈私〉(≠作者)が作品を共有する気分が生まれる。
このCのような歌が、最近の高野公彦には増えている。のびのびとさまざまに老人としての〈私〉を詠っている。絵画で言うところの自画像である。

高野公彦の自画像

絵画には自画像というジャンルがある。ほとんどの画家は自画像を残している。しかし、歌人の自画像はどうだろう。短歌は一人称の文学だからすべて自画像だといえは言えるが、

最初に示したCの類の歌は〈自画像〉と呼ばれることもなく、画家の自画像ほどにはそれと意識されずに読まれていると思える。自画像という観点から見たら高野公彦の歌はどう見えるのだろうか。そんな興味でCと、Cに近いBの歌を拾い出してみたら、五百を超えた。

①一九六三〜一九八一

悲しみを書きとくるめし紙きれが夜ふけ花
のごと開きをるなり 『水木』

丸めて捨てたはずの紙切れが、温度と湿度の変化によって開く。ただの反故紙がここでは〈私〉の分身のように見える。詠い方はAだが、青年のメランコリーを象徴した紙きれは、Cの〈私〉でもある。

あきかぜの中のきりんを見て立てばああ我
といふ暗きかたまり 『汽水の光』

秋空に属する生物のように明るくちよつと不思議な形体のきりん。対して地に属する黒い塊のような〈私〉。Bの歌で、読者は青年後期の〈私〉の渾沌とした精神の溜息を聴く。

方位なき暗闇のなか寝返ればうゐのおくや
まゆめ揺れにけり 『淡青』

寝返りを打ったというだけなのに、「有為の奥山」が寝室の暗さを越えて無常の世の冥さを思わせる。ひらがな表記がどろんとしたゆれを感じさせる。〈私〉はどこにいいのか。闇の中で揺れた「ゆめ」そのものが〈私〉なのか。幽体離脱したように、寝ている作中人物を見おろしているのが〈私〉なのか。BにもCにも見える不思議な歌。

②一九八二〜一九九〇

前肢が〈手〉となりはてしざびしさを思ひ
つつ食ふ焼きそばバゴーン 『雨月』

「手」となりはてしざびしさ」とは何か。四足歩行の先祖はある時、必要に迫られてか偶然にか二足歩行に転じた。以来手も脳も発達し便利さを得て欲望を満たし、今に至る。

こうして野生を失い続けてきたヒトの歴史が、作者に「なりはてし」と言わせ「ざびしさ」と言わせる。カップ麺を食べる今の〈私〉に、何百万年ものヒトの系統図を担わせた壮大な自画像で、Cに近いBの歌である。長い時間軸上の一点としての〈私〉という高野の特徴が顕著な、文明批評の一首だ。

雉子彦は野原を行けり老いそめて野の雨す
こし寒い雉子彦 『水行』

月下の雉子たちを詠んだ美しい連作中の一首。「雉子彦」はもちろん「公彦」である。四六歳の作であるから老いを感じするには少し早い。野の雨の寒さが「すこし」なのもいかにも中年後期のかすかなわびしさにふさわしい。この二首前には「月かげに雌を恋ひ啼けり草はらを歩む発光体の雉子彦」があり、女性を恋うる五十歳近い雉子彦と思えば、少なからぬ躊躇を押し進む「少し寒い」が絶妙である。雉子の姿をした自画像Cである。前歌集『雨月』の巻末に自らをくするみの木に模したエロスの匂う一連もあり、この頃、客体を借る自画像を詠む楽しみに嵌つたのかもしれない。

階段は異界への径 階上でほくを待つのは
少し老いたほく 『水行』

階下にいるのが今の「ぼく」、階上に着いたときには時が経って「少し老いたぼく」。未来に何があるか、最後には死があるはずの〈時間〉を階段の形で形象化した。内容は高野の歌として目新しくはないが、一人称の「ぼく」が魅力である。四九歳の〈私〉の中に少年がいる。二つの「ぼく」に、少年の〈私〉と今の〈私〉、今の〈私〉と未来の〈私〉が重なる。Bの形をとったCの自画像である。当時この「ぼく」が女性達の母性愛をくすぐり、ひそかに人気があった。

③一九九一〜二〇〇二

怠けたく酒が飲みたく遊びたく羊腸とせり

五十のころ

『地中銀河』

羊腸に「くねくね」のルビ、形も音もだだをこねているようだ。社会的人間として生きるのに飽き、真面目を捨てたくなった心理表現だ。出版社を早期退職する直前五十歳の歌。「鬱」の字の入りくむさまは五十過ぎしみづからの内見る思ひせり」などもあり、閉塞感あるいは転換点にある自覚が、この〈私〉を直接提示するBの自画像を生んだのだろう。

しんがりを行くのが好きで夜半の駅しんがりに出て望の月に会ふ

『天竺』

退職一年後、女子短大教授の頃。前出の「怠けたく…」と違い、ゆるやかな静かな満足感のある歌で、「しんがり」がいかに目立つのが嫌いな高野らしい。歌中の〈私〉の視線は前の人の背にあるが、やがてその視線は消え、月を見上げる〈私〉を空から見おろす〈私〉になっている。

高野にはちよつと優しくしてあげて飲ませ

てごらんあつばらばあととなる

『水苑』

女子学生の会話を通して〈私〉を描く。俯瞰する〈私〉と描かれる〈私〉との間に女子学生の目を介在させたCの自画像の変形である。大歌人でもなく大教授でもなく親しいおじさま先生として愛される〈私〉像と、純粋無垢とはいえないながらも、いながら読者と一緒には笑っているのである。

雪ふるや夜の仕事場に咳をして追咳をして

一人なりけり

『渾円球』

放哉の「咳をしても一人」を踏まえ、「追咳」が静寂の深さを生む。宮柁二の「頭を垂れて孤独に部屋にひとりゐるあの年寄り」は宮柁二なり」も思わせる。放哉より穏当な暮らし、当時の柁二より健康で十歳若い〈私〉であるが、ある夜の素の〈私〉を描く。本稿では楽しい歌を多く引用しているが、このような厳しく張りつめた自画像もある。

④二〇〇三〜二〇二〇

近う参れ近う近うと呼ぶゆゑに夜ごとへ伊佐美の瓶に近づく

『甘雨』

飲んべえの面目躍如だ。BやCのこの戯画化が以後どんどん増えて読者を楽しませる。

高野甲、高野乙あり寒き夜を甲は酔ひつつ

乙は歌を詠む

『天平の水煙』

「雪降るや夜の仕事場に…」の歌の厳しさから離れ、ゆるやかな自由な創作の場を詠う。酔う甲、詠む乙、さらにそれを眺めている丙も、三つの〈私〉がいるCの自画像。しばら

くすれば酔う甲だけになってしまふのだろう。

お年寄りと呼ばれたきかな地に落ちし胡桃
のやうに乾^{かわ}び縮^{ちぢ}みて

『河骨川』

「寒い雫子彦」から二十年、六五歳を超えて〈老い〉を受け入れる歌が増える。周囲に慕われて立派に枯れたいと、理想の〈老い〉を率直に述志する典型的Bの自画像。

をりをりに光をこぼす雲ありて地をゆくわ
れや流^{マド}浪^{マド}民のごとし

『現代短歌』二〇一五・一

夫人の逝去から半年の歌。つかまるものもない広い空と果てしない曠野のただ中に放り出された感覚が、「ノマド」。苦痛の中でも美をみる高野らしい向日性が、「をりをりに光をこぼす雲」にある。大きな絵のような歌で、小さな点の〈私〉を俯瞰する〈私〉がいる。

一人なる夕餉を終へて組板の使はなかつた
裏も洗へり

『無縫の海』

朝食のあと二次会をすることく葡萄みづみ
づしきを食みたり

同

以来、家事をする〈私〉が様々に描かれるようになった。字の一点一画をゆつくり書く高野がここにもいる。一人丁寧^{ていねい}に暮らす寂しさと充実がにじむ。BのようでCの自画像だ。

割引きのカキフライあり迷ひつつ近づいて
ゆく老いは高野氏

同

きつと誰もが高野の歌として思ってもみなかつた自画像Cだ。自己をも歌そのものをも自由に解き放つて、〈老い〉と
いかに親しみ合っているかを思わせる。

階段は鈍器のやうだ 渋谷駅地下のかいだ
ん、かいだん、かいだん

『短歌往来』二〇一七・五

高齢者を代表して都市計画の不備を訴えるかのような「かいだん」の繰返し。いらついた叫びに諧謔がある。

乗り越しをしたる己れを叱るとき老犬を叱
ることく寂しき

『短歌往来』二〇一七・五

切ない告白だ。Bかと思うとCに見えてくる自画像。

以上のような諧謔の歌を高野は「自分をからかうという感じですな」（『ぼくの細道うたの道』）と応えているが、よほど自分が強くないと、この客観性は持てない。そして現実の自分を愛し、受け入れ、ゆるさないとこれらの自画像は描けない。これら最近の高野の歌をみると、ゆるく余裕をみせた老いの滋味の、その豊かさに打たれる。

宮柵二も、BやCの自画像を詠った。

病みながら大き尻ひりてかしこきろ六十七
歳を迎へたりけり

『緑金の森』

ガラス戸は二つをわけてあらしめぬ消えざ
る雪と病む老人を

『純黄』

柵二のユーモアと客観化は、高野に至って自由自在に大暴れしている。雪国育ちの老病者と瀬戸内育ちの健康老者の違いもあるが、高野の工夫によって開かれた世界なのだ。

へこんにやくの馬に心太の幽霊が乗つた
みたいな日本酒の酔ひ

『短歌』二〇一九・九

本当に酔ったことのある人でないと分からない歌だ。